

地域で輝く女性起業家サロン（第6回） 議事概要

日時：令和7年5月10日（土）14：45～15：45

場所：福岡県男女共同参画センター「あすばる」

【出席者】

麻生 有花	スタイルクリエイト株式会社 代表取締役
権藤 菜津姫	株式会社ORARE 代表取締役
中原 亜希子	株式会社プロデュース 代表取締役
西崎 彩智	株式会社Homeport 代表取締役
森川 春菜	オングリットホールディングス株式会社 代表取締役
笠 淑美	一般財団法人ウェルネスサポートLab 代表理事
小安 美和	株式会社Will Lab 代表取締役
横田 響子	株式会社コラボラボ 代表取締役
吉岡 佐和子	株式会社山陰合同銀行 代表取締役専務執行役員/鳥取営業本部長
三原 じゅん子	内閣府特命担当大臣（男女共同参画）
岡田 恵子	内閣府男女共同参画局長
黒瀬 敏文	内閣府政策統括官（共生・共助担当）
小八木 大成	内閣府大臣官房審議官（男女共同参画局担当）
原 典久	内閣府大臣官房審議官（男女共同参画局担当）
服部 誠太郎	福岡県知事
浦田 智子	福岡県人づくり・県民生活部長

1. 開会

2. 挨拶

（三原大臣）

- ・意欲ある女性起業家の皆様方をしっかり応援していきたい、女性が働きたいと思える職場を地方につくることによって、若者や女性に選ばれる地方をつくるということにつなげていきたいと思い、この地域で輝く女性起業家サロンを開催している。
- ・漠然と起業したいと考えても、どうしていいのか分からないと思い諦めてしまう女性が非常に多いという話も聞く。そうした方たちをうまく導き、コーチングをして、夢をかなえてさしあげるということができれば良いと思っている。
- ・起業といっても、いろいろな規模がある。お金を多く稼げるということではなく、本当に自分のやりたいことを仕事という形にできれば良い、そういうものも私は十分すばら

しいのではないかと思っている。それぞれがそれぞれの思いを遂げられる、そうした仕事づくり、職場づくりをぜひ応援し、何か手を差し伸べたいと思っているので、今日は皆様方が起業されるまでにどのような御苦勞をされたかということ、起業して終わりではなくそこがスタートであるので、起業後から今に至るまでにどのような御苦勞をされてきたか、未来へ向けてももっとこういうところに手を貸してくれればいいのに、と思うことがあればぜひお聞かせいただきたい。

- ・福岡県においては、Bloom福岡と題して、オンラインで無料相談窓口を開設し、起業に必要な情報提供や家庭との両立のための相談対応などを行っていると聞いている。まさにネットワーク、伴走型の支援、何かあったときに相談できる方々がいるということ、といったことが非常に重要だと思っている。そうした福岡県の取組も素晴らしいと思うので、どういう形でそれを全国各地につないでいけるのか、そして、もっとこうしたほうが良いというところについても、ぜひお聞きしたいと思っている。

(服部知事)

- ・福岡で、地域で輝く女性起業家サロンを開催いただいたことに感謝申し上げます。
- ・日頃から本当に様々な分野で頑張っている女性の皆様のグループの会、あるいは中小企業、小規模企業の皆様の勉強会や異業種交流会などに積極的に参加し、意見交換をさせていただいている。今日参加されている皆様の中には、そういう場でお会いした方もいる。それぞれの分野、また新しい分野に向けてのチャレンジを続けておられることに敬意を表する。
- ・性別、年齢、あるいは障がいの有無、国籍などにかかわらず、誰もがそれぞれの能力を存分に発揮して輝き、活躍することができる、そんな福岡にしていきたい。そういった中でも、やはり人を育てることは極めて重要であり、それが基礎であると思っている。その中で、女性の活躍はこれまでも、またこれからもしっかりと応援していきたい。
- ・そうしたことから福岡キャリア・カフェを立ち上げ、先ほど御紹介いただいたBloom福岡を始めた。また、起業・創業するにあたってはお金が要るが、なかなか銀行が貸してくれないことがあるので、県の新規創業資金の中に、金利も優遇、そして保証料は県の保証協会が負担をするという形で、女性専用の女性創業型という制度も設けている。こうした取組も実施してきているが、今日は皆様からいろいろな御意見、御体験を聞かせていただき、これからの福岡県の施策、気づきの参考にさせていただきたい。

○起業家の皆様より自己紹介

(麻生氏)

- ・「女性が、輝き続ける人生を。」という企業理念を基に、保育事業や保育士、対人支援のソーシャルワーカーの教育事業、Bloom福岡の受託運営をしている企業。
- ・社員は90名ほどいるが、99%が女性で1%のみ男性という珍しい企業。自分自身がシン

グルマザーで、2人の娘を育てながら起業をしているが、その中で社会課題を感じる部分がたくさんあり、それを何とか起業を通して解決していくことができないかという思いで株式会社を設立している。初めは個人事業主であったが、法人成りから株式とし、今年が創業10周年。

(権藤氏)

- ・もともとは製薬会社出身であるが、福岡市に自社工場を持つ、天然由来原料に特化したナチュラルスキンケアメーカーを昨年立ち上げた。2022年に出産して、日本でベビーソープを探したときに、生まれたばかりの我が子にシンプルでナチュラルなものを探したが、残念ながら使いたいと思えるものが日本にはなかった。また、ナチュラルだから安心安全というわけでもなく、しっかり臨床試験もして、かつ天然由来に100%特化したものというのが日本にはほぼなかったので、じゃあ作ろうと思って立ち上げた。
- ・現在は、自社ブランドのほか福岡県の特産品、例えば糸島のやぎ牧場のやぎミルクを使ったやぎミルク石けんや、あまおうの酒粕石けんなど、1次産業を6次産業化する手伝いを、OEMを通しておこなっている。そういう特産品を作ることで国力を少しでも強化できればと考えている。

(中原氏)

- ・北九州市で認知症の高齢者に特化した施設を運営。起業したのはちょうど25年前で、最初はカラオケのレンタル事業から起業した。2000年に介護保険法ができて、カラオケのレンタル事業から福祉用具のレンタルに商品を変えていって、今、施設を運営している。
- ・重度の認知症に特化しているが、弊社の特徴としては、生きづらい方たちをスタッフとしても雇用しているというところで、今、DEIも含めて推進している。

(西崎氏)

- ・片づけを基点に女性のキャリアアップと家族の体制を支援している会社。24歳から44歳までは専業主婦で、46歳のときに前の夫と離婚したが、そこから2人のこどもを育てていく中で、何もやることがなかった。ただ、主婦としてやってきた20年間でどうにかビジネスチャンスに変えることはできないかという思いから、片づけをしてあげるのではなくて、自分でできる女性をたくさんつくろう、そうすることによって、家に帰ったときも「私、いいじゃん」と思える女性をたくさんつくることによって、女性の自己肯定感を上げたいし、そして、そこを基点に社会にもっともっと出て行ってほしいし、アウトソースすることもできる、というような事業を展開している。

(森川氏)

- ・橋梁やトンネルのインフラ構造物の点検調査を行っている。構造物の老朽化はどんどん

進むが、実際に点検する技術者というのはどんどん減っている状況であるので、未経験者でも業務ができるようなシステムをつくることで、未経験者の方に業務を手伝っていただける、それによって雇用の促進と技術者不足を解消したいという思いで起業した。

- ・起業前は自分も専業主婦であったが、友人が突然シングルマザーになり、小さなこどもを2人育てながら働く場所がなかなかないという相談を受けた。夫が当時ゼネコンで勤めており、建設業界の課題というのを聞いていたので、何かツールがあればお互いの課題をマッチングできるのではないかと考え、写真を撮って、その上からなぞると図面ができるという仕組みから起業した。

(笠氏)

- ・大学卒業後にランドスケープコンサルタントという事業をやっている会社に就職し、その後長女が小学校1年生になったことを機に、自分の働き方を考え、個人事業主という選択をした。そこから、福岡赤十字病院の方から働き方相談を受けたことが設立のきっかけ。
- ・自分が二十歳のときに父親が余命宣告を受けたが、そのとき自分の妹二人が看護師、介護士になり、自分の生活ともども支えてくれたこともあり、その思いに共感して財団を設立するに至っている。キャリア志向の看護師の望まない離職の話を聞き、少子高齢化とキャリア志向の看護師不足の慢性化を解決すべく、かかりつけナース制度を普及させるとともに、看護師も含む働く世代が、健康的に働き続けられる仕組みづくりを行っている。同様に、次世代の働く世代が安心して健康的に働き始められる仕組みづくりにも取り組んでいる。
- ・看護師を中心に対人支援職の方が多く所属しているため、ほとんどが女性。

○先輩起業家、起業のサポートに従事する立場として本サロンに加わっていただいている
コアメンバーから挨拶

(小安氏)

- ・女性のリーダー育成、起業家支援をしながら、現在は特に地方自治体のジェンダーギャップの解消のコンサルティングを中心に行っている。
- ・最初に起業したのは10年前で、そのときにあすばるで女性塾の講師をさせていただいたこともある。懐かしい思いと、やはり福岡は女性の起業家も管理職もとても層が厚いということをひしひしと感じながら、楽しみにしてきた。

(横田氏)

- ・20年近く「女性社長.net」というサイトを運営し、女性経営者の方の事業継続を支援する取組をずっと続けてきた。福岡は昔から創業支援も手厚く、ユニコーン企業の後押しも増えていると聞いていて期待はしていたが、女性専用のサポートもかなり手厚いこと

に驚いている。

(吉岡氏)

- ・島根県と鳥取県をマザーマーケットとし、山陽、関西、東京へ広域に営業展開している地方銀行。
- ・起業すると必ずお金の問題が出てくるが、なかなか銀行に相談しにくい、というような声を聞くので、どうしたら皆様の事業が継続して健やかに成長していけるのかというヒントをいただいて帰りたい。

3. 意見交換

○女性の起業が促進されるためにどのようなサポートが必要か

(麻生氏)

- ・Bloom福岡の受託をしている中での課題感などについて。
- ・何からスタートしたら良いかわからない、やりたいことはあるがどう形にしていって良いかわからない、スタートしたがうまくいかない、など様々なフェーズの方がいるが、共通して、自分の現在地が分かっていない方が大変多い。
- ・また、自分自身がなぜその事業をやっていききたいのかという部分が、夢物語のような方もとても多い。夢を持つことは悪いことではないが、現実にするためのステップを踏んでいくための、フェーズごとの支援というものが非常に重要。Bloom福岡では今年度から、フェーズごとの支援を強化していくことになっている。ゼロからスタートする方、まだ今からどうしていいかわからないという方や、スタートしたうえで資金調達などをどううまくやったら良いかわからないという方など、いろいろな起業の段階のサポートが必要だと感じている。

(権藤氏)

- ・現在、2歳のこどもの母であるが、実際に起業してすごく困ったことを伝えたい。
- ・女性の起業を促進するため、特に幼児の母の代表として、ベビーシッター代の経費化と、0～2歳児の保育料の減額というような実態に即した育児支援を検討いただきたい。製薬会社にいた頃は産休・育休を通じて大学院へ通いMBAを取るなどリスクリングをしていたが、夫の仕事の都合がつかないときはベビーシッターを頻繁に利用しており、ベビーシッター代は大きな負担と感じていた。また、私の場合は一旦復職し、起業したのだが、次にぶつかった壁は認可保育園の保育料であった。当時、園庭が広くのびのびした環境に子供を預けたいと考え、認可保育園を中心に探していた。無事、第一希望の認可保育園に入ることができたが、保育料は福岡市の最大額8万3000円/月であった。その後、起業を決め世帯収入は半分になったにもかかわらず全く減額されなかった。そんなに大きな額を毎月払うことはできないということで、急遽認可外の施設に転園したという経

緯がある。

- ・地域の女性起業家として、展示会に行ったり何かの資格をとったりするとなると、やはり東京や大阪など都市部への出張が必要な機会がとて多い。そういうときに、こどものベビーシッター代は経費として出るものだと思っていたが、直接事業には関係ないものとして出なかった。20万くらいの金額であったが、それが全てはねられたことは収入が不安定な起業初期の起業家にとって非常に大きな問題。また、子供を預けられないと仕事や出張をすることは不可能なので、個人的には直接事業にかかわる大切な事項だと感じている。全額経費化は難しいとしても、半額など、何らかの助成、支援がほしい。自分のように出産等を機に何か解決したい課題を見つけ、起業する女性はあると思うので、その方たちが諦めないための仕組みが必要だと考える。

(中原氏)

- ・自分は起業して25年経つが、そもそもの話として、例えば、弊社で働くスタッフの中で特に能力がある、というスタッフであっても「自分が起業する」という考えはない。
- ・自分は、最初から起業したくて起業したという形ではなく、一緒に生活していたパートナーが倒産したことをきっかけに、29歳のときに仕方なく起業したが、起業してみたところすばらしい世界を知ることができた。この楽しくてわくわくする世界を伝えていきたいとは思いますが、そもそも「起業する」という思考、マインドセットを持てるような機会があればよいと思っている。

(西崎氏)

- ・今、女性1,300人程のコミュニティーを持っていて、卒業生も3,500人くらいいるお片付けのプロジェクトをしているが、その中で、家が片付くなかで起業していく方は結構いると思っている。
- ・自分が起業したきっかけも、離婚して、そこから子どもたちを育てるためにというのがあったが、そのときに、自分が一番困ると思ったのはお金より家族のこと。「ママだけが頑張らない社会」をつくりたいと思い、片づけをみんなでやろうというプログラムを行っているが、やはり起業しようにも女性は家事、育児、介護などという家庭内の役割がたくさんあり、それが足かせになってしまう。結局、家事も育児も自分でやり、その上に仕事、となるのであればやらなくていい、と思ってしまう方が多いと思うので、家の片づけをし、家を整えることで役割の見直しをしてほしいと思っている。そこで、やはり起業する本人だけではなくて、家全体が一つのプロジェクトチームになれるような、そういった働きが必要だと思っており、例えば、女性だけが起業セミナーに参加するのではなくて、夫婦で一緒に考えるような、夫婦で準備ができるセミナーや、子ども向けに「ママの仕事を知ろう」という体験セミナーなど、起業する前の家族のマネジメントと一緒にやるようなプログラムがあれば、「私だけが頑張らなくても家族が応

援してくれる」という原動力になると思っている。ぜひ女性の起業を家族全員の挑戦だというような位置づけにしてもらえたら、とても良い。

(森川氏)

- ・制度は少しずつ増えてきていると思うが、資金面に課題がある。立ち上げの際、2名を採用して進めていったが、半年ほどは業務がとれないことが続いた。銀行に融資をお願いしにいくと、まず「実績、決算を出してください」と言われるが、そもそも初年度なので無い。契約書もなく、ないものばかりの中で、融資を得るのには本当に苦労した。制度はどんどんできていくが、継続的に金融機関と連携をとれるような、ちょっと成長したときにもすぐに相談できるというような環境を整えば良いと感じている。

(笠氏)

- ・起業をして、事業を継続するためには、人、物、お金という3つのリソースがとても重要。地方都市・福岡では、特に人、中でも経営人材がすごく不足していると思うし、やはり首都圏と比べてお金、資金の出方の選択肢が少ないと思っている。
- ・設立から5年たち、一般財団法人という非営利型、事業型ではあるものの、なぜ5年間継続できたのかと振り返ると、やはり人の面。自分がランドスケープデザインという仕事をしていたことによって、事業構想、事業実施という経験、大きな公園を構想するに当たって実施設計をやっていくということを同時にやれるスキルがもともとあったことで、対人支援職の皆さんがどうしたら健康的に働けるような場づくりができるか、というように、専門職だけではない、偏らない役割分担ができたということはあったと思う。
- ・半年間任意で活動をしていたところ、利用者の一人が我々のやっていることにとても共感してくださり、遺贈意思の下に生前に財団を設立してくださったという経緯がある。その後、残された財産を全て、不動産も含めて譲ってくださったので、人と物とお金を揃えることができた。また、自分の場合は同窓という縁故を頼って、「非営利団体というものを運営したことがないので、福岡にいて、こういうことに視座が高い人を紹介してくれないか」と頼み、とても良い方を紹介してもらえた。特に視野が広く、グロースという目線を持ちつつ、全方位的に事業を見られる支援者に会うことができ、そこからまた人とお金に出会うことができ、今5年間続けられていると思うので、そういった点はすごく地方格差として、特に非営利、社会課題という文脈では大きい課題かと思っている。
- ・また、個人事業主のときから女性から相談を受ける場面が多くあったが、麻生さんがおっしゃったように、何かしたいが何をやっていいのかよくわからない、という人など、良い支援者に出会うことができれば良い活動ができるのに、と思うことは多くある。

(横田氏)

- ・ 今日集まってくださった方は比較的初期投資が必要な事業をしている方が多いように見受けられるが、初期から投資が必要だったのか、最初は実はそんなにお金をかけなかったのか、などということをお伺いしたい。

(麻生氏)

- ・ 自分は異業種から保育所を展開したので、最初、資金融資については非常に困った。とある銀行からは、「シングルマザーだけど、借りて返せるの」と言われ、悔しい思いをしたこともある。今、自分は事業計画書をしっかり作りましょう、と言う側にいるが、なぜ強く言えるかという、当時自分も数字に強くなかったところ、運よく商工会の厳しい方に出会うことができ、「数字が読めないと社長にはなれないよ」と言われながら特訓を受けたことで、自分で資金繰り表を作れるようになった。そのうえで銀行や日本政策金融公庫と話をし、チャレンジするための土台を作ることができるようになり、5年で保育所を5か所設置、運営することができた。
- ・ 金融機関の担当者はどうしても2、3年でいなくなってしまうので、その度に次の担当者はどんな人か、と見ながらやらないといけず、そこは非常に苦労している。

(吉岡氏)

- ・ どうしても、銀行に相談するのは敷居が高いという方が多いが、特に銀行は、事業を継続していく計画を書面で求めることが多い。夢を描いていて、「数字のことは後で、とりあえずお金を貸してほしい」というご依頼もあるが、銀行としても、ご融資して1年後に全財産なくなってしまった、というような不幸なことにならないためにも慎重にならざるを得ない面もある。
- ・ 金融機関では今、金融経済教育として、資産運用、NISAやローンの使い方、特殊詐欺防止など、お金に関するリテラシー向上を目指し、学生や企業の方にお伝えする機会を増やしているが、その中で起業についてもメッセージを発信していきたい。
- ・ 地方で働きたい、地方でやりたい仕事が見つければ、地方も元気になる。働く組織の中で夢をかなえられなかった方もいらっしゃると思うので、起業も働き方の一つの選択肢であるということも伝えていく必要がある。そして、やはりこどものころから働くことは就職と起業という選択肢があることを伝え、「起業をするのであればこういった数字に強くなければいけないよ」という概念を植え付けることも大切なのだろうと思った。

(小安氏)

- ・ 地方と首都圏の格差をしっかりと抽出して、課題化しなければいけないと思いながら聞いていた。首都圏であっても同じ課題を抱えているケース、例えば女性起業家の両立支

援については、雇用されている女性の両立支援よりも、やはりまだまだ足りていないと思う。恐らく国レベルの話だと思うが、東京でも同じ課題がある。

- ・福岡ならではの課題は何なのだろうと思って聞いていたが、1つは人だと思う。笠さんがおっしゃっていたような視座の高い人。また、麻生さんがおっしゃっていたように、「女の子だからこれだけでいい」「お母さんだからこの程度でいい」というアドバイスではなくて、真に厳しいアドバイスをして、グロースさせてくれる人がどれだけ地域にいるのだろうか。ここにもしかしたら首都圏と地方における差があるのかもしれないと思いながら聞いていた。

(中原氏)

- ・介護施設なので、施設の建物が必要になる。最初は人とお金もないので、中小企業家同友会という会に入って、そこで「グループホームを運営したい」という相談をした。すると、建設・不動産をしている方たちから、「遊休の建物があるからそこを安く貸してあげる」というところで最初はスタートした。9年くらいは賃貸で運営していた。
- ・そこから自社で建てていくことになるが、その際、土地を担保に何とか借入れはできるものの、25年経っても大きな利益が出る仕事ではない、というところで、借入れが膨れ上がってしまう。自分は今55歳で事業継承を考え始める中でも、そこは怖いというスタッフもいるので、自分の借入れが終わってから事業継承するしかない、と思ってはいるが、次の展開を考えている自分もいて、そこが悩みどころ。

○どうすれば女性が働きやすいと思える地域へと変えられるか

(笠氏)

- ・地方都市では、特に女性が働きやすいということは、全ての人が働きやすくなることだと考えている。核家族化が広がり、家庭内でのマネジメントが求められる社会の中では、やはり多種多様な価値観、多種多様なライフスタイルの中で働き続けられる女性たちが、ほとんどの課題を解決するのではないかと思い、この団体を運営している。
- ・令和3年度に経済産業省のフェムテック等サポートサービス実証事業を、福岡市の500名の働く女性を対象に行った。この500名のうち多くは子育て世帯であったが、その女性たちの9割9分ぐらいが複数の不調を抱えており、それが長期化していた。そのため、自分が不調かどうか分からないという状況にあり、また、不調であることが普通の状態なので、改善したいとは思わないという声もあった。では、どうしたら健康的に働くことができるか、と聞くと、企業側に何かを求めるのではなく、かつ外部の家事代行サービスを使うのでもなく、「家事・育児等の無償ケア労働を家庭内で分担できるサポートが必要」という意見を多くいただいた。
- ・さらにそのアンケートをもとに、内閣府の孤独・孤立の文脈の事業、昨年度は休眠預金

等活用事業内で健康支援・家事シェア支援を行ったが、3年前にやった令和3年度のフェムテックのときと、大きく相談内容が変わってきていた。そこでは、自分の健康よりも子育ての課題、特に発達の課題の相談がとて多く、また、それに伴う不登校などの登校課題がとて多き悩みとして多きあり、それらが要因となつて心身に不調をきたしているというデータが出てきた。結局、この地方都市では男性と比べると女性の方が無償ケア労働を負担していることが多き、母親の健康度が低下し、その結果、家族全体の健康度が低くなる、といった負の連鎖が生まれていることがわかった。

- ・インタビューの中で、大企業で意思決定層に残つていきたいという方の、「どうしてもこどもが不登校になると、自分を責めてしまう。自分がこんなに仕事に邁進しているという、この気持ちがいやましいのではないか」という声や、シングルマザーの方の、「こどもに対して自分を大切にしなさいと言いたい、自分が自分のことを大切にできていない今、そのことを言うのにとて多き苦しい思いをしている」という話を聞き、本当に核家族の中で起きている出来事が、なかなか社会や企業、行政のほうに届いていないとわかった。相談が必要な人が相談できない状況になっている、相談できるような健康状態ではないという状態になっていると思ったので、声なき声を拾っていき、つないでいくということが必要だと考えている。
- ・社会課題解決のビジネスをどんどん普及させていこうという潮流にはなっているが、やはり首都圏のモデルを地方都市のモデルに当てはめようとすると、少し大き過ぎて、全然きめ細かな社会課題は解決できないと思う。昨年度、株式会社PolliPolliさんの政策提言のプログラムに参加したが、そこのビジネスモデルのように、企業や投資家の方が社会活動に資金提供していくというプログラムなどが首都圏ではたくさんあると思う一方で、地方都市の課題を地方都市の資金家の皆さんが資金調達させていくというような、もう少し資金の選択肢が融資だけではない形というのを取ってもらえると、もつと社会課題に対して女性に取り組める手段になると思うので、そういった文脈もあると良いと思っている。

(森川氏)

- ・まさに今日のような、生の声を言い合える場はすごくいい場だと感じている。商工会等々に参加していても、女性の委員の方が少なく、このような地域単位のミーティングも、まだまだ少ないと感じている。
- ・実際に声を反映するという意味では、市民の提案型のコンペのようなものをイベントとして開催したりすると、実際に出会いが生まれたりするのではと思う。自分自身も、福岡県が主催したビジネスプランコンテストで出会った方に支援者になっていただいたということがあるので、そういう機会がたくさんあると良いと思う。

(西崎氏)

- ・いつも家庭というテーマで女性の支援をしていることが多く、今は福岡だけでなく東京にもオフィスを作って2拠点で活動している。今年になってから、「さすが九州」という言葉が出てきているが、九州男児は何もやらない、というようなことがデータでも出ていると言われている。実際、全国にお客様がいるが、地方の男性はやらない方が非常に多い。その結果全て奥さんに負担が行ってしまって、先ほど笠さんが言ったように、まさに仕事も食事のお世話もこどものことも全部女性がやらなければいけない。その中でシングルマザーなどになり、仕事を3つも4つもする中でこどものことが見られず、気づいたらこどもが昼夜逆転して、不登校になっていってしまい、そして自分も離職まで追い込まれている、という母親が非常に多い。そう思ったときに、やはりどこまでいっても男性の意識改革と、夫婦で本当に話し合える環境をつくらないといけない。女性も仕事をしましょう、と言われるが、結局、「家事を手伝うよ」という言葉がいつまでこの国に残るのだろうかと思っている。職場で女性の役員割合をこれだけ上げましょうといっても、「なぜ家事を私たちばかりがやらなければいけないのだろう」という思いから、実は私たちのコミュニティーの方でも、どんなに会社から打診されたとしても、これ以上の役職は断る、という女性が非常に多い。なぜかというと、「絶対に旦那がやらないから。アンフェアだから私は働きたくない」という声が非常に多い。
- ・女性たちが本音を会社には当然言えずに、結局我慢して辞めるというこの社会を、私はいいかげんもう終わりにしたいと思っている。九州ならではということで一つあげると、男性の意識改革。手伝うのではなくて、仕事がシェアなら家事もシェアというところがスタンダードになる社会をつくってほしいと思っている。

(中原氏)

- ・少し生きづらい人たちを雇用しているという観点から。働きやすい地域社会ということで、今、特に「うつ病が治る会社を作りたい」ということを掲げ、力を入れている。うつ病の方だけでなく、障害者手帳を持たないグレーゾーンの方など、ハンディキャップを持つ人たちを多く雇用している。1割ほど多く人を入れる必要があるが、うつ病の方などの中で「あなたも個々だったら働けるかも、私は生き生き働けるようになった」というように紹介の連鎖が起こっており、そのおかげで人手不足にはなっていない。また、本人は健常者であるが、ダウン症のこどもがいるなどの理由で働く時間が制限されている方にも合わせたシフトを組んでいくなど、多くの方の力があって会社が成り立っている。
- ・難しいかもしれないが、そういう点の支援があれば、もっとハンディキャップを持つ人たちが活躍したり、チャレンジしたりできる社会になるのではないかと考えている。

(権藤氏)

- ・職業上全国に出張するが、東京都や大阪府はベビーシッターが見つかりやすい。福岡で

も、夫の仕事の都合がつかないときなどには、何とかしたら見つけることもできるが、もっと地方部、例えば鹿児島や東北の方に行くと、そもそもベビーシッターが見つからない。行政や保育所に連絡しても、県外から来た人の一時預かりはしていないなどで、非常に困っている。

- ・福岡県は地方に比べ働きやすい環境ではあると思うが、さらに地方の場合、例えば夜に講演会があるときなど、こどもを預ける場所がなく仕事を諦めざるを得ないという話を聞くこともあるので、とても困っているという方は多いのではないかと考えている。

(麻生氏)

- ・弊社は20代から60代以上の方まで働いている企業であるが、20代の社員や大学生のインターン生などと話すと、結婚か、仕事かを最初から選択してしまう意識がかなり強いと感じた。自分が起業する中で、選択することへの違和感を覚えている。こどもを育てていくことと、自分が仕事をする、起業していくということや、キャリアアップしていくということについて、なぜ女性は特に選択ばかりするのだろうと、いつも思っている。そこでなぜ選択するのかと若い人に聞くと、「親がそうしていたから」「女性は選択しないといけないと思っている」というように言う。もちろん、環境が整わないとそういう意識づけというのはできないと思うし、意識があっても環境が整わなければできないということもあるが、私は、女性自身も自分たちの意識を変えていかないといけないのではないかという思いが強い。男性だけが、という話ではなく、女性の意識改革もとても重要なのではないかと感じているので、社員にはよく「選択せずに、両方と言って良い」という話をしている。
- ・妊活などをしていて周りに言いづらい、という方に対しては、「全然大丈夫だよ、サポートするよ」という話をするが、その中で、家族の理解もあって、会社としても理解をしていて、とても優秀な方であるのに「このまま働きたいが、迷惑ですよ」と言う方がいた。環境づくりを受け入れる中小企業の社長や、女性起業家がもっと増えると良いが、その根底にある最初から選択してしまう女性の考えを変えていかないといけないのではないかと感じており、中原さんもおっしゃったような、啓蒙活動がもっとあると良いのではないかと思う。

(小安氏)

- ・3点あるが、1つ目は、みなさんおっしゃっていた性別役割分担意識について。家事・育児負担の問題であるが、福岡県は43位というデータもある。みなさんが総じておっしゃっていたことは数字にも出ていると改めて思い、そこをどうしていくか。女性起業家支援は女性側だけの支援になるが、環境をどう整えていくかということを行政には意識してもらえると良いと思う。
- ・2点目はオールドボーイズクラブについて。商工会議所やスタートアップに福岡は非常

に力を入れていると思うが、男性のオールドボーイズクラブになっていないだろうかということがとても気になっている。そのためにそこに入りづらかったり、そこでの支援が受けづらかったりすることもあると思うので、その点に触れてほしい。

- ・3つ目は、女性は社会課題解決のビジネスをすることが多いと言われているが、ここはお金が集まらない。自分もそうだが、よく儲からないことをやっているねと言われる。東京などであれば、まさに社会的インパクト投資のようなものが当たり前になってきているので、非財務も含めてのインパクト投資が、福岡でどこまで一般的になっているのかというような点について、首都圏と福岡との格差、違いというところをデータで可視化しながら、克服方法を考えていくと良いのではないか。

(吉岡氏)

- ・私どもの銀行では、働き方改革を含めて、時間休の制度ができたり、不妊治療のための制度があったりなど、女性が働きやすい仕組みのために、金融機関の中でもおそらく相当フレキシブルに改革してきているので、離職率も下がっている。しかしそれは女性が家事や子育てを行う、という前提でそれらの制度がつくられている。男性も育児休業は女性と同じようにあるが、取得期間は平均で約2週間程度となっている。いよいよ家事、育児、介護が女性に偏っている時代は変えていかなければいけないだろうということ、話を聞いていてつくづく感じた。
- ・地方では以前は近所の人同士でこどもを預かる、というようなこともあったが、最近は色々と課題もあり、なかなかそういったベビーシッターのようなことをしてくれる人は少ない。しかし、それこそがビジネスチャンスであり、そういったところに商機はあるのだろうという気はした。
- ・男性、女性にかかわらず起業して成功し、順調な経営者のアドバイスを受けられるような機会を、経営者との距離が近い地方でこそ作っていかねばならないと感じた。

(横田氏)

- ・起業家が身近でないというような話は今回も出てきていたところであるが、私は、起業家はとても欲張りな人種だと思っている。仕事も、子育てもすべてやりたい、とう思いでチャレンジしている人がいるということ、そういった多様な大人にこどもたちも若手も含めて触れ、「チャレンジしてよい」と思える機会が非常に重要だと思っている。改めて、起業という選択肢を作るだけでなく、女性たちの解放という観点も含めて考えたい。
- ・私は、事業計画書さえ書ければお金を借りられるかというと、そうではないと思っている。人脈、実績も含め、計画書に真実味があってこそお金が借りられるということになっているので、その点で女性は不利な面が残っていると思う。金融機関等で女性向けの優遇した融資も出てきているので、以前よりそういったものを活用できる環境にはある

が、サポートとして、先ほど話があったような、商工会で遊休資産を比較的安価で貸しにくさる機会があったり、ネットワークがあったり、あるいは販売実績も含めた実績をつくれる機会があったりなど、そういったことがないと資金のサポートに近づくことはできないのではないかと改めて感じた。

- ・3点目は性別役割分業について。これは九州も苦勞されていると思うが、全国的な課題だと思う。夫婦、家族ブロックがないという話は、男性起業家にも共通。起業という活動をどう促進していくか、ということには何らか工夫が必要。まだあまりアイデアはないが、これまでの扶養控除や三号保険など、そういう仕組みがあることで共働きを抑制してくるということがあったので、逆にいえば、パートナーがチャレンジしていればシッター制度が使いやすい、など、何かインセンティブにつながるような仕組みを取り入れていくということも考えられるのではないかと。

(服部知事)

- ・冒頭、福岡で活躍されている女性の層が厚い、あるいはそれに対する専用サポートも手厚いという評価をいただいた。しかし、課題として、性別による固定的な役割分担意識というものがまだ非常に強く、全国43位という御指摘もあった。また、中小企業の最も身近な支援機関である商工会あるいは商工会議所には、もちろん女性部もあり、私も会合に出席して意見交換等を行っているが、数がまだまだ少ない。青年会議所の皆さんとも、ボーイズクラブになっていないかという点についてはよく話して、徐々に青年会議所も女性に入ってもらえるような仕組みにしていこうと取り組まれている。
- ・そして、起業していくためには、女性だけではなく、配偶者の方、子どもを含めた家族のサポートも必要で、それを理解してもらうために家族ぐるみで参加できるセミナーを実施してもいいのではないかと御意見もあり、大いに参考にさせていただきたいと思う。私たちは、起業を望んでいらっしゃる女性の方だけを対象に、施策を実施してきたと思うので、よく考えたい。
- ・性別による固定的な役割分担意識について、私たちはつい「手伝う」と言ってしまう。韓国の総領事御夫妻と私は家族ぐるみで付き合わせていただいているが、先般「手伝う」と言ってしまったところ、御夫妻から「手伝うという言葉はダメですよ、1.0:1.0でしょう。それぞれが役割を分担するということだけであって、どちらかがどちらかを手伝うということではないのでは」という、和やかな中にも厳しい御指摘をいただき、心から反省をしている。そのような意識をスタンダードにしていくことが必要。
- ・経営に当たって、高い視座から指摘、支援、御指導いただける支援者の方が必要。また、資金の問題もある。これらは女性起業家のみならず、スタートアップ全てに共通する課題だと思っており、本県では人材バンクもつくっている。今後もベンチャーキャピタルの皆様との出会いの場を定期的に創っていくので、活用いただきたい。
- ・若いころから財務の知識が必要というのは、その通りだと思っており、昨年度から金融

機関に協力いただいて、全ての県立高校で財務・金融経済教育を実施している。私も参加したが、その日の株式相場のデータなどを交え、勉強していた。

- ・全体を通じて意識の問題があった。男性の意識を変えていかなくてはいけない。一方で女性自身の意識改革も必要ではないかという意見もあった。本日聞かせていただいたことを、国とも連携しながら、今後の施策に活かしていきたい。

(三原大臣)

- ・女性活躍や、アンコンシャス・バイアスなど、もう何十年同じことを言い続けているのかという思いの強い方が今日はお集まりだと思うが、本当にそうである。意識改革という点は何年も、何十年もやってきていながらも、徐々にしか改善していないというところだと思う。しかしながら、その中でも女性がどうやったらもっと生き生きと暮らしていけるのか、笑顔で幸せになっていけるのかということを、求めていかなければならない。「こんなに頑張っているのに、これだけ働いているのに、これ以上働くのか」というようなことではなく、私たちが本当にやりたいことをやって、笑って色々な話を共有できる、そういう社会をつくっていくためには、今まさに選ばれし皆さんがどうやって頑張って後輩たちを、未来を、女性たちをしっかりと支えていけるのかということを、ここで少し踏ん張って考えていかなければいけないところなのかなと思っている。
- ・そうしないと、意識改革もなかなかできていかない。やり方はいろいろあるのかもしれないが、私たちがやはり声を上げて、いろいろなところに発信していくということも、少なからず何かのいい影響をもたらすことになっていくのかと思う。
- ・これから頑張っていこうとする若い男の子たちに、家事や子育て、介護をすることが当たり前だという意識を持ってもらう。あるいは家事力というものをつけてもらうこと、これがどんどんと当たり前になっていくということ。それもやはり声を上げなければ浸透していかないのだろうというふうにも思うし、また、お母さんたちのそういう姿を見せていくことで自然に、「僕たち手伝いたい」と思うようになるかもしれない。今は「手伝う」というふうになるかもしれないけれども、これからは当たり前、「僕たちがやらなきゃいけないんだ」というふうに変わっていく、そういう形もつくっていかなければいけないのかと、皆様を見ていて感じた。

4. 閉会